

日本杜甫学会第八回大会

二〇二四年九月六日 於 横浜国立大学

シンポジウム「教材としての杜甫の詩」

杜甫「春望」から広がる世界

横浜国立大学 高芝麻子

本稿で引用する杜甫詩は本文・書き下しともに原則として『杜甫全詩訳注』（講談社）に拠り、他書については引用の後に示した。ただし引用文の句読点や字体などは適宜改めた。杜甫詩の題下の付記は清・仇兆鰲『杜詩詳注』による成立年と、『杜甫全詩訳注』に付された作品番号である。

一 はじめに 三つの視点

- ・近体詩 作者の営みから読みを深める
- ・歴史と詩 思いのデータベースとして
- ・李徴 杜甫になるか虎になるか

二 近体詩 作者の営みから読みを深める

文部科学省「高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説 国語編」（平成30年7月）
第二章第六節「古典探求」

〔思考力、判断力、表現力等〕

A 読むこと

（2）ウ 古典を読み、その語彙や表現の技法などを参考にして、和歌や俳諧、漢詩を創作したり、体験したことや感じたことを文語で書いたりする活動。

〔資料1〕盛唐・杜甫「月夜」詩（七五六年秋／〇一四一）

今夜鄜州月 今夜 鄜州の月

閨中只独看 閨中只だ独り看る

遙憐小兒女 遙かに憐む小兒女の

未解憶長安 未だ長安を憶ふを解せざるを

香霧雲鬢湿 香霧 雲鬢湿ひ

清輝玉臂寒 清輝 玉臂に寒からん

何時倚虛幌 何れの時にか虚幌に倚りて

双照淚痕乾 双つながら涙痕の乾くを照らさん

↓「読むこと」の活動としての漢詩（近体詩）創作

短詩・定型詩の表現の魅力

対句の難しさと凝縮力

詩人の営みの追体験

三 歴史と詩 思いのブータベースとして

〔資料2〕盛唐・杜甫「春望」（七五七年春／〇一四八）

国破山河在 国破れて山河在り
城春草木深 城春にして草木深し
感時花濺淚 時に感じては花にも涙を濺ぎ
恨別鳥驚心 別れを恨んでは鳥にも心を驚かす
烽火連三月 烽火三月に連なり
家書抵万金 家書万金に抵たる
白頭搔更短 白頭搔けば更に短く
渾欲不勝簪 渾て簪に勝へざらんと欲す

歴史は鳥観図的に世界を捉える

その鳥観図の中で生きるひとりひとりの声の記録として詩を読みたい

四 李徴 杜甫になるか虎になるか

〔資料3〕中島敦「山月記」

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に列ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところ頗る厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。

↓杜甫は初任の官として提案された河西尉（河西がどこであるかは諸説あり確定できない）

が、従九品上または下を拒否し、東宮つきの右衛率府胄曹参軍（従八品下）に就いた。李徴の「江南尉」の官位は未詳だが、上県の尉は従九品上、中・下県は従九品下となる。

〔資料4〕盛唐・杜甫「官定後戲贈」詩（七五五年冬／〇一一九）

不作河西尉 河西の尉と作らざるは
淒涼為折腰 淒涼として腰を折るが為なり
老夫怕趨走 老夫 趨走を怕るれば
率府且逍遙 率府に且く逍遙せん
耽酒須微祿 耽酒して微祿を須ち
狂歌托聖朝 狂歌して聖朝に托す
故山歸興尽 故山 歸興 尽く
回首向風飈 回首して風飈に向かふ
↓右衛率府胄曹参軍という官に就くことについて自虐的に詠う

〔資料5〕盛唐・杜甫「去矣行」詩（七五五年冬／〇一二〇）

君不見鞞上鷹 君見不 鞞上の鷹

一飽則飛掣 一たび飽くれば則ち飛掣するを

焉能作堂上燕 焉くんぞ能く堂上の燕と作らんや

銜泥附炎熱 泥を銜へて炎熱に附す

野人曠蕩無靦顏 野人 曠蕩たりて 靦顏無し

豈可久在王侯間 豈に久しく王侯の間に在るべけんや

未試囊中餐玉法 未だ囊中の餐玉の法を試みず

明朝且入藍田山 明朝 且つ入らん藍田山

↓右衛率府胄曹參軍という官を辞めたいと詠う

〔資料6〕盛唐・杜甫「早秋苦熱堆案相仍」詩（七五八年秋／〇二二一）

七月六日苦炎蒸 七月六日 炎蒸に苦しみ

對食暫餐還不能 食に對して暫く餐せんとするも還た能はず

每愁夜來皆是蝸 毎に愁ふ 夜來 皆是れ蝸なるを

況乃秋後轉多蠅 況んや乃ち秋後に轉た蠅の多かるをや

束帶發狂欲大叫 束帶 發狂して 大いに叫ばんと欲す

簿書何急來相仍 簿書 何ぞ急に來たりて相仍る

南望青松架短壑 南のかた青松の短壑に架するを望み

安得赤脚踏層冰 安くんぞ赤脚もて層氷を踏むを得ん

↓安史の乱が起り、捕らえられていた長安から逃れ、とりたてられ左拾遺（従八品上）

となった杜甫が左遷され、華州司功參軍（従七品下）であったときの、役所勤めの辛さ

を詠う。

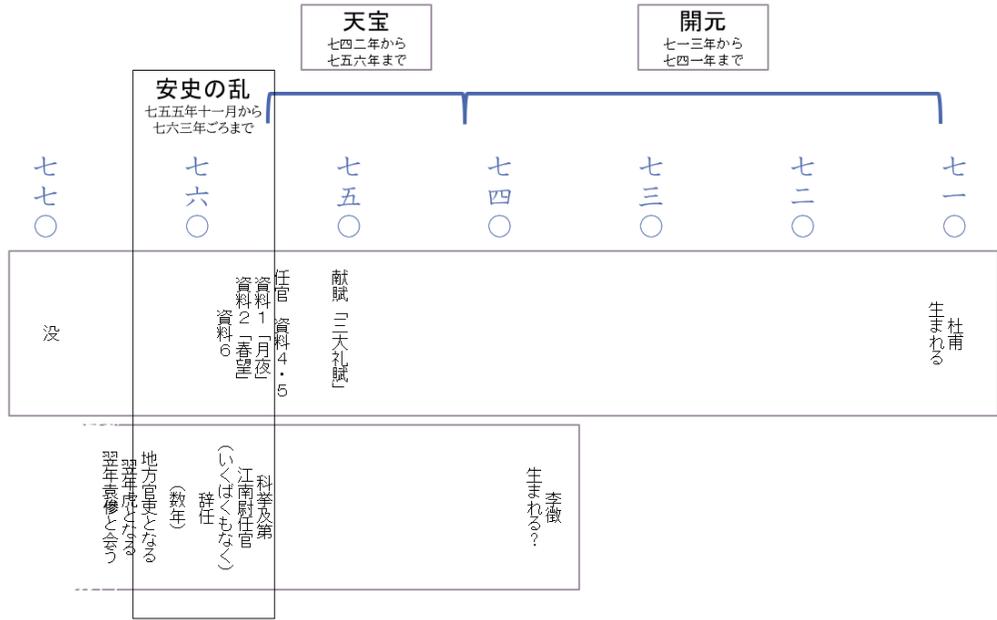
↓「山月記」は李徴の独白を聞く同期のエリート袁愔の視点で展開する

↓杜甫は李徴と似た「こんなはずではない」という思いを抱えており、もう一人の李徴である

五 まとめ

古典は人類のひとりひとりの情緒や思いを蓄積した膨大なデータベースであり、あえて功利的に表現するとすれば、個人的な些事から世界的な危機まで、あらゆる規模のリスクや被害を乗り越えてきた人類の営みの重要な一部であり、科学技術だけでは乗り越えられないリスク共生のメンタル面を補いうるものである。

近体詩や対句という形式をも駆使して、激動の歴史を生きる個人の感情を現代に伝える杜甫は、その思いのデータベースという意味において、（全訳があることもあり）教材的な価値が高く、「山月記」などとの比較読みなど、まだ多くの可能性を秘めているのではないか。



参考文献

塩谷温『国訳漢文大成 文学部 晋唐小説』(国民文庫刊行会、一九二〇)
 今東光等訳『支那文学大観』第八卷(支那文学大観刊行会、一九二六)
 中島光夫等編『中島敦全集 一』(筑摩書房、一九七六)
 清・仇兆鰲『杜詩詳注』(中華書局、一九七九)
 下定雅弘・松原朗編『杜甫全詩訳注 一』(講談社、二〇一六)
 高芝麻子「天宝の末年」の杜甫と李徴―「山月記」と漢詩の学びを結ぶもの」、『古典教育デザイン研究』六号、二〇二二)
 高芝麻子「中島敦文庫から見る中島敦における漢詩人——杜甫と高啓を中心に——」、『関西近代文学』第三号、二〇二三)

本研究はJSPS 科研費「安史の乱をめぐる文学の研究(22K00361)」の助成を受けたものです。